歴史のきざはしから

第２回

一高野球部、大勝利の日

今や、国民的スポーツにまで成長した、日本の「野球」。輸入文化であるベースボールがわが国に地歩を築くまでには様々な紆余曲折があった。その草創期には本学教養学部の前身、第一高等学校の野球部がきわめて大きな足跡を残している。

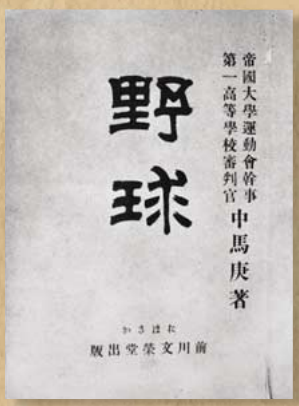
時々、プロ野球関係者は「米国のベースボールと日本の野球は違うんですよ」などと言う。言われてみれば、たしかに野球ファンなら一度は「同じルールなのにまるで違う競技のようだ」と感じたことがあるはずだ。思想、宗教、スポーツ、食べ物……日本は輸入文化を独自に発展させてしまう国である。もっとも、ベースボールに限っていえば、「野球」という和名を考え出したからこそ、より日本的なスポーツとして発展を遂げられたのではないだろうか？

一般的に、ベースボールという競技に「野球」なる訳語を当てたのは正岡子規だといわれている。が、どうやら真相は違うらしい。最初にベースボールを「野球」と呼んだのは、本学教養学部の前身、第一高等中学校（以下、一高）野球部の中馬庚（かのえ）という人物なのである。中馬庚は一高野球部初代チームの選手。明治21年に一高に入学した彼は二塁手として活躍した。その一高は明治27年に第一高等学校と改称しているが、彼は東京帝国大学文科に進んだ後も一高野球部の顧問を務めていた。一高野球部は明治29年の時点で38連勝という大記録を打ち立てており、国内の邦人チームの中では飛び抜けて強かった（第一回黄金時代と呼ばれている）。その勢いもあって、中馬は初の『野球部史』を編纂するが、その際に「野球」という訳語を考え出して部史に載せたのである。彼は翌年、『野球』（明治30年発行・前川善兵衛刊）という野球解説書を著しており、名著との評判が高い。中馬が日本野球史に残した功績はかなり大きいといえるだろう。

そんな日本野球草創期に、誇り高き一高野球部は「初の国際試合」に臨んだ。試合の顛末はきわめて詳細に記録されている。

明治28年当時、邦人チームの中で向かうところ敵なしだった一高野球部は、横浜のアマチュア外人倶楽部に何度も試合を申し込んでいた。この倶楽部は横浜在住の米国人が組織しているもので、ベースボールの腕には大層自信を持っていた。かのスポーツは米国の国技だし、彼らは体格的にも当時の多くの日本人を上回っていたので当然といえば当然だろう。その外人倶楽部が一高の度重なる試合申し込みに折れ、ついに明治29年５月23日、本邦初の国際試合を行なう運びとなったのである。

ところが、５月20日からずっと雨が降っていた。心配になった一高の投手・青井鉞男（えつお）と顧問・中馬庚は、当日雨天の場合の相談をするため横浜に赴いた。外人倶楽部の答えは「23日が雨の場合、24日は日曜日で

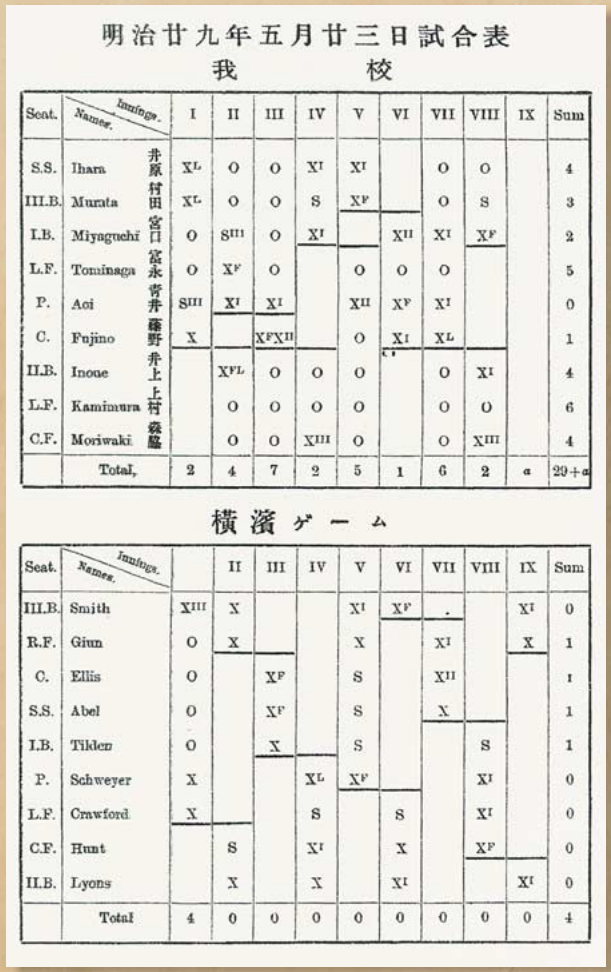


（写真・上）初国際試合の翌年に出版された中馬庚の著書、『野球』。（写真・右）『野球部史』は『校友会雑誌』の号外として出版された

明治24年一高チーム。中列左から二番目が中馬庚。現役時代は二塁手だった

安息日だから試合は出来ない。25日以降も試合は無理だ。我々にはビジネスがあるので忙しい。だから当日が雨なら試合は秋か来春に持ち越すしかない」というものだった。二人は意気消沈して、本郷・向岡の一高自治寮に帰ってきた（一高生は全員寮住まい。当時の学生数は約千人である）。

その後、雨は前日になっても止まなかった。初の国際試合の話は一高全体に知れ渡り、野球部員のみならず、一千名の寮生の間に「決戦前の悲壮感」が漂っていた。夜中になり、日付が変わると、控え所に「選手は本日をもって南浜に赴き、決然敵地に入る……」といった檄文が貼られ、寮生の中には「雨の中（横浜までの）８里の道を下駄で歩いて応援に行く」などと意気込む者まで現れる始末。選手達も他の寮生も空模様が心配で起きていたが、午前3時頃に小降りになってきたため選手達を眠らせ、他の寮生が代わる代わる天候を見守った（見守ったとてどうなるものでもないはずなのだが……）。



明治廿九年五月廿三日試合表

我　校

Seat.	Names. / Innings.		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	Sum
S.S.	Ihara	井原	X^{L}	O	O	X^{I}	X^{I}		O	O		4
III.B.	Murata	村田	X^{L}	O	O	S	X^{F}		O	S		3
I.B.	Miyaguchi	宮口	O	S^{III}	O	X^{I}		X^{II}	X^{I}	X^{F}		2
L.F.	Tominaga	富永	O	X^{F}	O		O	O	O			5
P.	Aoi	青井	S^{III}	X^{I}	X^{I}		X^{II}	X^{F}	X^{I}			0
C.	Fujino	藤野	X		$X^{F}X^{II}$		O	X^{I}	X^{L}			1
II.B.	Inoue	井上		X^{FL}	O	O	O		O	X^{I}		4
L.F.	Kamimura	上村		O	O	O	O		O	O		6
C.F.	Moriwaki	森脇		O	O	X^{III}	O		O	X^{III}		4
	Total,		2	4	7	2	5	1	6	2	a	29+a

横濱ゲーム

Seat.	Names. / Innings.		II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	Sum
III.B.	Smith	X^{III}	X			X^{I}	X^{F}	.		X^{I}	0
R.F.	Giun	O	X			X		X^{I}		X	1
C.	Ellis	O		X^{F}		S		X^{II}			1
S.S.	Abel	O		X^{F}		S		X			1
I.B.	Tilden	O		X		S			S		1
P.	Schweyer	X			X^{L}	X^{F}			X^{I}		0
L.F.	Crawford	X			S		S		X^{I}		0
C.F.	Hunt		S		X^{I}		X		X^{F}		0
II.B.	Lyons		X		X		X^{I}			X^{I}	0
	Total	4	0	0	0	0	0	0	0	0	4

初の国際試合のスコア＜校友会雑誌第58号附録『野球大勝記録』より＞

当日朝８時。雨はまだ止まない。が、そこへ横浜より電報が！「シアイデキルスグコイ」。もう、大騒ぎだ。寮生の間から次々に「万歳！」の声があがる。念願の国際試合が実現するのだ。

ちなみに、この後に横浜から、もう一通の電報が届いた。「ナンジニクルカ」。これを読んだ中馬は突然、怒り出し、電報を床に叩きつけた。「無礼な奴らだ！『汝、逃ぐるか』とは何たる失敬！」。しかし、すぐに笑い始めたという。電報の文面が「何時に来るか」という意味だと気づいたからである。顧問である中馬庚からしてこの有様だったのだから選手達の国際試合に対する意気込みはさぞ激しかったに違いない。

かくして、一高野球部員は汽車にて新橋から横浜へ。400名を超える寮生達も一緒に応援に向かった。そして午後３時、横浜公園グラウンドで本邦初の国際試合がプレイボールと相成ったのである。当時の一高『校友会雑誌』には熱気あふれる試合状況が記されている。

「後三時我先つ守り判定者ストーン氏令を下して開戦を命す球は米國製の新球なり滑脱馭すべからす我青井投球常を失しスミス氏Four Ballの恩に浴す……」（校友会雑誌第58号附録『野球大勝記録』、明治29年６月20日刊）

１回表、青井投手は外人倶楽部に打ち込まれ、４点を先制されてしまう。が、一高野球部は１回裏に２点、２回裏に４点を上げ、逆転する。

「校友の聲援耳を聾し洋客の嘆賞寧ろ憫むべく我終に四點を奪ふて二點を贏す是に於て勝負の決已に定まり……」（同『野球大勝記録』）

この後が凄かった。外人倶楽部は毎回無得点、一高野球部は毎回得点、その結果、29対４というスコアで一高が大勝してしまったのだ！

一高生の喜びようたるや、如何ばかりだったか。その夜、一高ではファイヤーストームが催された。会の冒頭に、寮総代・守随啓四郎が挨拶したのだが、その言葉がまた凄い。

「今日勝單に我校の勝ならす聊以て邦人の勝ちと稱するを得べし」。今日の勝ちは我が校だけでなく日本人全体の勝利だと言うのである。実際、この守随の考え方は日本人の多くに共通していたらしく、一高大勝利の報は瞬く間に全国に喧伝された。一高はこの試合を皮切りに、計４回、外人倶楽部と対戦するのだが（３回目まで一高勝利。４回目で敗北）、試合のたびに世間の反響が大きくなり、それまで野球の話題など取り上げなかった新聞が大きく報じるようになった。これには当時の世相も深く関係しているようだ。明治27年～28年、日清戦争があり、我が国は勝利を収めていた。当時は、多くの日本国民が戦勝の勢いを感じていたとともに、明治初期からの不平等条約への反感もあったのではないだろうか。

初の国際試合制覇という快挙を成し遂げた一高野球部。彼らのプレーは、すでに「日本野球」の醍醐味に満ち溢れていたに違いない。